

日本書紀卷第二

初公刊

神代から仁賢天皇まで冒頭十五卷を所収、
うち神武天皇から神功皇后までの七卷が現存最古！
三種の神器の一つ草薙神剣を祀る熱田神宮、
そこに伝わる日本最古の正史を初公刊

重要文化財

熱田本 日本書紀

全3冊

【高精細カラー版】

迫力の大型本で体感する

12月刊行

熱田神宮編

原本調査をふまえた、多角的な解説を収録

〔書誌〕 荊木美行・遠藤慶太〔熱田社史〕 野村辰美・福井款彦
〔訓点〕 木田章義・大槻 信〔料紙〕 渡辺 滋

内容見本

八木書店

刊行の辞

熱田神宮宮司 小串和夫



三種の神器の一つ草薙神剣を奉齋する熱田神宮は創祀以来一千九百余年の長い歴史を誇り、約六千点の宝物が今に伝えられています。その中でも「熱田本」として知られる『日本書紀』は、いわゆる吉田本系の写本といわれ、全三十巻のうち冒頭十五巻（巻第十一欠）を伝えるもので、日本書紀校合上重要な位置をしめるものであり、昭和二十四年に国宝（現重要文化財）に指定されました。

附の寄進状に拠れば、南北朝時代の永和三年（一三七七）に権宮司で祝師であった田島仲宗の所望により、熱田亀井山円福寺の二世嚴阿上人が奔走して同寺の本寺である京都四条の金蓮寺の四世浄阿上人が奉納したものであります。この四世浄阿上人は足利尊氏の伯父で円福寺の一世嚴阿上人同人との伝えがあったことは恩師鎌田純一先生の調査に詳しいのですが、その奉納経緯等の確かなものとしても貴重なことは、言うまでもありません。

嘗て紀元二千六百年の記念として巻第三の神武天皇紀の複製本を世に出したことはありましたが、全巻については今回が初めてであります。しかも最新の高精細カラー印刷によるもので、墨や朱の濃淡はもとより、料紙の質感までが見事に再現されており、原本を間近に見るようであり、解説には先学の研究を踏まえ、最新多角的にして詳細な研究成果が反映されており、まことに興味深いものがあります。

今回の刊行は創祀一千九百年の記念をも籠めたものですが、これによって次代に伝える文化財の劣化を最小限に抑えることが出来、熱田日本書紀の研究が尚一層進展することになれば、弥々御神徳の発揚にもつながり日々神明に奉仕する者としても望外の喜びであります。

研究者はもとより各方面の皆様方に活用されますことをお願い申し上げます。刊行の辞といたします。



熱田神宮

熱田神宮は皇位継承の御璽である「三種神器」の一つ草薙神剣を祀り、伊勢の神宮に次ぐ由緒ある大社。年間十三度の特殊神事を含めて七十余度の祭典が永永と承継がれている。

日本武尊は東夷平定後に尾張国造の館に留まって、その女、宮簀媛を妃としたが、やがて神剣をそこに置いたまま近江（滋賀県）伊吹山に向かい、病に罹り亡くなった。そこで宮簀媛は熱田の地に社を建て、神剣を奉齋したのが熱田神宮の創祀である。その後、一時神剣は皇居に留められたが、朱鳥元年（六八六）六月勅により熱田に還座して今日に至る。

平安時代の延喜の制では名神大社に列し、正一位に昇叙。源頼朝ら武家からの崇敬も厚く、足利・織田・豊臣・徳川の諸氏いずれも尊崇して社殿の修築など積極的に行った。明治四年（一八七二）官幣大社に列し、大正六年（一九一七）勅祭社に治定された。鎮座地は名古屋の南、熱田台地の南端に位置し、周辺には東海地方最大の前方後円墳で、宮簀媛の墓と伝える断夫山古墳や、日本武尊の御陵という白鳥古墳がある。この地はまた、熊野、富士とともに蓬莱の地（神仙の住むという霊山）に見立てられ、中には蓬莱宮としての信仰が生まれた。

近世の熱田の町は「宮」とも呼ばれる宿駅、東海道交通の要所として発展、今なお神宮は名古屋有数の交通量の多い道路に囲まれているが、神宮の境内は、樹齢一千年前後の楠が数本あるほか、「不実梅」や「太郎庵椿」などの名木があり、市民のオアシスとして親しまれている。中央に建つ宝物館では熱田本『日本書紀』をはじめとして、神宮の歴史と信仰を物語る約六千点の宝物が逐次入れ替えられ展示されている。

本文を復元する醍醐味

【書誌解説】遠藤慶太



日本書紀は奈良時代編纂当時のテキストが残っているわけではない。書き写され、読み継がれるなかで一千三百年近い歳月を乗り越えてきた書物である。もしオリジナルの日本書紀を求めようとするならば、今ある本と古い写本を比べ、文字の違いを照らし合わせて、正しいテキストを復元しなければならない。

この地道な基本作業をおこなうときに古い写本、それも原本の姿を伝える鮮明な画像があれば、どれほど助けになることか想像していただきたい。

たとえば熱田本日本書紀の場合、巻第九・神功皇后紀は現存最古の日本書紀写本になる。神功紀には三國志（魏志倭人伝）を引用する箇所があり、神功皇后の年代を卑弥呼の三世紀にあてたことで有名である。邪馬台国論争でも採りあげられてきた。

ところが日本書紀が引く三國志と、現行の三國志では文字が異なる。邪馬台国の使節を迎え入れた帯方郡の太守の人名がそれぞれ「鄧夏」「劉夏」となっているのである。鄧と劉、いずれが正しいのか。ここで熱田本をみると、現行の日本書紀で「鄧」と読んでいるのが、じつは異体字の「劉」であることが判明する。三國志は「劉夏」であるので、やはり日本書紀はきちんと三國志を引用していた。そして熱田本日本書紀のみが、正しい文字を伝えていたことが分かるのである。

じつに小さなことと思われるかもしれない。しかし、これが本文を再建する基本作業である。そして古写本の価値とは、広くゆきわたっているテキストの誤りを是正できる点にあるのだ。

鮮明な図版を手許において、現在まで日本書紀が受け継がれてきた歳月を思い、奈良時代のものとの姿に迫ってゆく。高精細の影印が日本史の研究にもたらす効果ははかり知れない。

（皇學館大学准教授・日本古代史）



解説執筆者が語る みどころ

古代日本語を探る基本資料

【訓点解説】木田章義



日本書紀の訓読に用いられた語彙は「日本書紀古訓」と呼ばれ、辞書の項目として、また用例として珍重されている。しかし古訓についての研究はあまり進んでいない。「左右（もとこ）・屯集（いはむ）・要害（ぬみ）・悉（ふつくに）・誘（をこつる）・似（たうばる）」などは日本書紀にのみ使用され、古訓特有語とされるが、「椀（まり）・礼（あや）・訛（よこなまる）・弁（わきだむ）・父母（かぞいろは）・肖（あゆ）」のようにその後も使われ続けた語も多い。特に『類聚名義抄』のような古辞書、また「漢文訓読語」との共通性があり、古訓が奈良時代の古い語彙・語法を反映していることを示唆している。

今回、カラー版で刊行される熱田本は、巻第一から巻第十五までの十四巻であるが（巻第十一欠）、巻第三から巻第九までは最古の写本となる。その古訓は諸本と共通するものも多いが、現行註釈書が拠る寛文版や兼右本とは異なる訓もある。例えば「跨_レ地」（巻第七景行紀）の「跨」は、本書はマタコヘテであるが、マタガルの訓をもつ本もあり、「またぐ・またがる・またこゆ」の三語があったらしい。また「遠近」（巻第十五仁賢紀）は、本書は「ヒナミヤコ」であるが、兼右本はミヤコヒナである。「翠嶺万重」（巻第七）の「万重」は、本書はトラクカサナレリである（5頁に図版）。他本はヨロツヘ（ナリ）で、字面に惹かれた訓のようである。ともに本書の訓が自然である。古訓は、発展過程に検討の余地が残るが、勅命によって何度か開催された講筵の際の訓読法を基盤としているらしく、かなりの信頼

がおけるものであり、日本語史や諸本関係を探る上で、極めて重要な資料である。本書の刊行を機会に古訓の研究が進めば、古代日本語の様相だけでなく、諸本の間も一層明らかになるであろう。

（京都大学名誉教授・国語学）



高精細カラー版

印刷見本

用紙・サイズ・色等、製品版と同様です

日本書紀卷第二

神代下

天照大神之子玉我吾勝、速日天忍德耳尊

娶高皇產靈尊之女栴幡千千姫生天津彦

火瓊杵尊故皇祖高皇產靈尊持鐘憐愛以

宗養心焉遂欲立皇孫天津彦火瓊杵尊

以為葦原中國之主然彼地多有螢火光神及

蛭尊耶神復有草木咸能言語故高皇產靈尊

熱田本を読む

数ある日本書紀写本のなかでも最古の7巻を含む熱田本には、独自の古訓など、みどころ満載！



八岐大蛇神話と草薙剣

(巻第1下 神代上第8段一書第二・三)

八岐大蛇神話は記紀神話の中でも特に有名である。素戔鳴尊は暴虐な八岐大蛇を酒で眠らせ、その間に斬り殺した。尾を斬ると剣の刃が欠け、開いてみると剣(草薙剣)が出てきたという話である。

左に掲げた記載によると、この草薙剣は古代においては熱田神宮の祝部(神職)によって祀られているとみえる。熱田神宮は現在も草薙剣を御神体として祀っている。



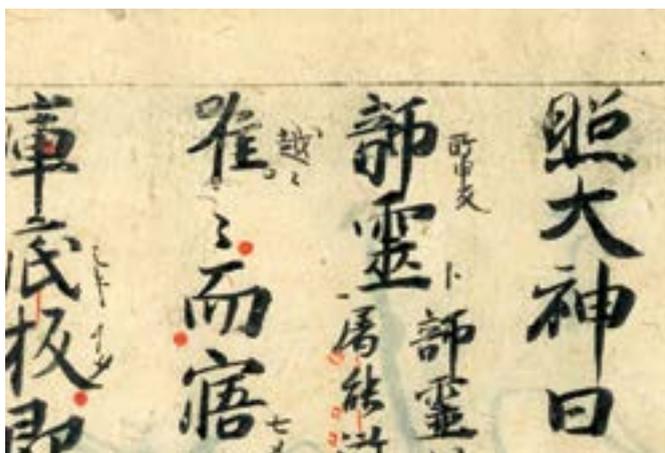
卜部本系統写本としての熱田本(巻第9 奥書)

奥書の記載から、卜部兼熙が応安5年(1372)から翌年にかけて巻第9を書写・校合した卜部本系統の写本であること、京都金蓮寺の4代浄阿が熱田神宮に熱田本を奉納したことが判明する。



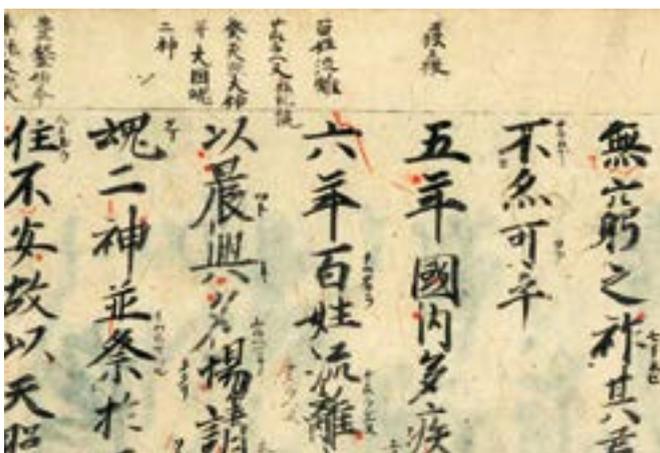
日本書紀最古の古訓(巻第7 景行天皇40年是歳条)

熱田本には日本書紀の最古の写本が含まれ、そこには古訓が記される。熱田本では「万重」に「トラクカサナレリ」と訓を振るが、他の写本では「ヨロツヘ(ナリ)」と記し、熱田本の訓を採るべきであろう(本内容見本3頁参照)。



独自の傍訓(巻第3 神武天皇即位前紀戊午年6月条)

数ある日本書紀の写本の中でも熱田本にしか載せない傍訓がある。「詔」には「所申反」という漢字の発音を示した反切や、「唯々」には「越々」という万葉仮名が振られている。



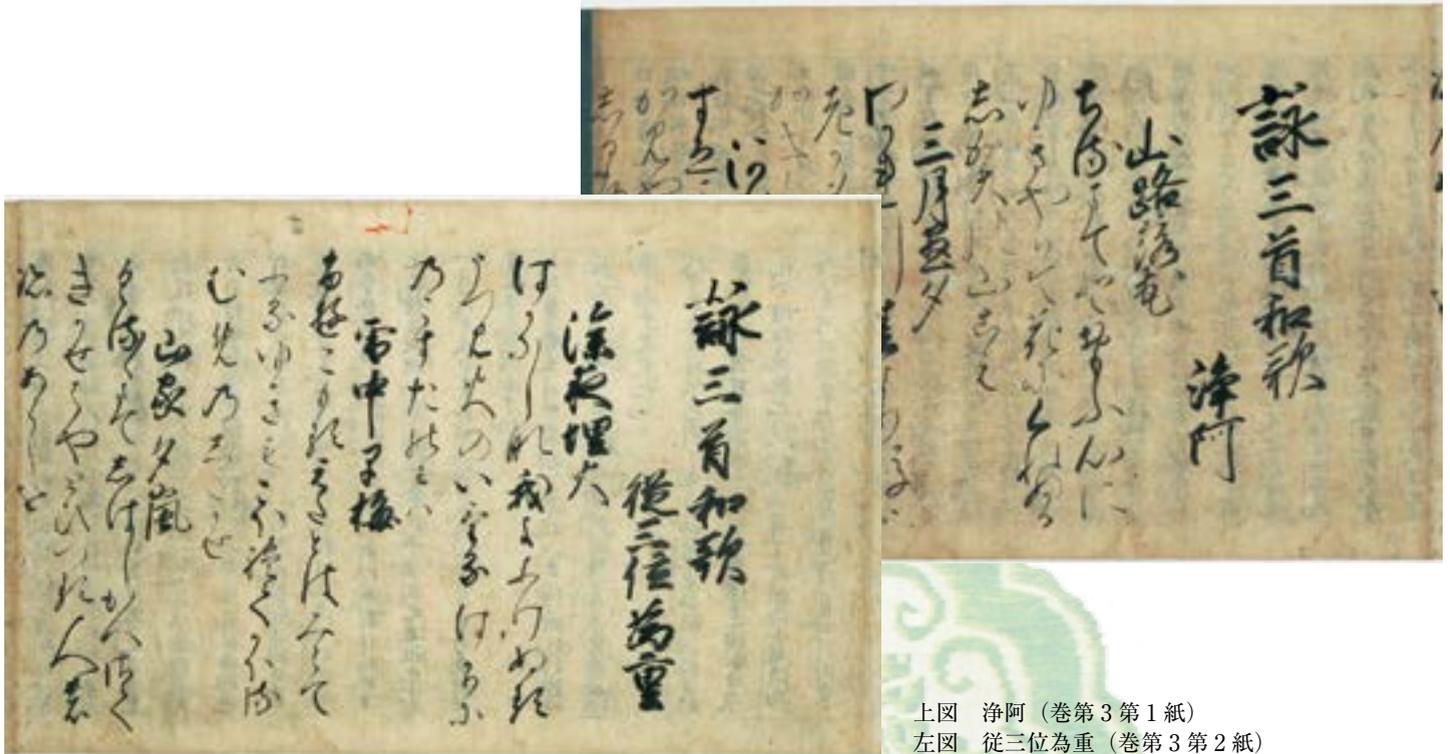
独自の私記説(巻第5 崇神天皇6年条)

熱田本の傍注には他の日本書紀の写本にはない独自の私記が確認できる。本文の「流離」の傍注に「サハラヘヌ」と記され、上の欄外にも「百姓流離」の注として「サハラヘヌ私記説」とみえる。

多様な写真

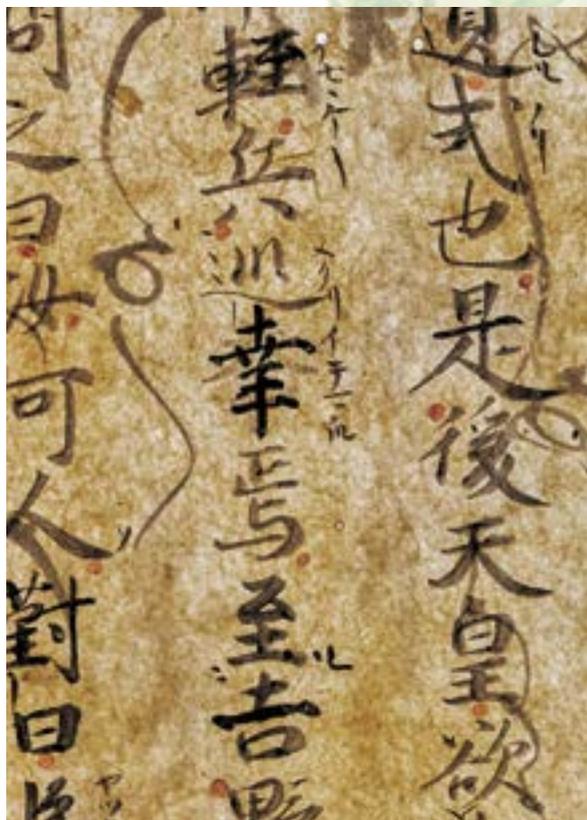
紙背の和歌懐紙全 163 点、透過光写真、顕微鏡写真など、熱田本日本書紀を理解するためのあらゆる図版を収録

和歌懐紙



上図 浄阿（巻第3第1紙）
左図 従三位為重（巻第3第2紙）

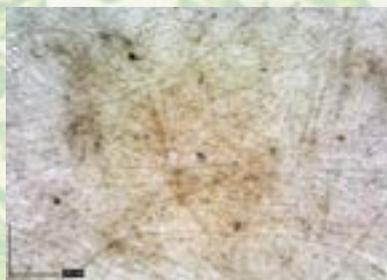
透過光写真



異体字「幸」の訂正（巻第3神武紀）

「幸」の異体字「幸」から「幸」に訂正している。異体字「幸」は『日本書紀』田中本（平安初期写、奈良国立博物館蔵）のような古い写本にみられるが、なじみがない字形なので、通用の字形に訂正をしたとみられる。

顕微鏡写真



漉返紙の痕跡

繊維間に墨痕が認められることから、漉返紙に書写されていることが分かる。

上図) 巻第1第1紙表（『日本書紀』面）
下図) 寄進状



料紙の表面加工と墨のノリ

下地に塗布された白色顔料層の部分的な剝離によって、そのうえに書かれた墨も剝離している。

上図) 巻第1第2紙表（『日本書紀』面）
下図) 巻第9第1紙表（『日本書紀』面）



1) こだわりの原本撮影

影印版は写真原稿が命！

原稿となる写真が影印出版に適したものでないと、高精細カラー版は実現できません。では、影印出版に適した写真原稿とは？ カメラの精度とカメラマンの撮影技術が高いことはもちろんですが、影印仕様

に特化した様々なポイントがあります。

- ①高透明度のガラス版を使用し、撮影原本の水平を維持
- ②左右にストロボ光源を配した二投光式で均一なライティング
- ③頁毎のトリミングなど実際の仕上がりを想定したカット割り

より高精度な影印出版の実現のために、八木書店では編集担当者の立ち会いのもと、影印出版に最適な原本の写真撮影を行います。



2) レイアウトだって気を抜きません

本を読みやすくするために、組版（レイアウト）は大切な作業です。Adobe InDesign という組版ソフトを使い、影印本文のトリミング、柱・丁付・紙数等の割付を行い、印刷所へデータ入稿します。

影印本文各頁の柱・脚注には、書名・巻次・年月日・紙数等を掲出します。その他、裏書がある場合は本文と相互対照できるように頭注表示するなど、利用の便を図ります。トリミングには細心の注意を払い、両端行を前後頁で重複させて、卷子本のつながりを確認できるようにします。



3) 最新技術&プロによる製版・印刷

影印出版に欠かせないのが「製版」の技術です。印刷を担当する奈良・天理時報社では、1971年刊行開始の旧「天理図書館善本叢書」以来、数十年にわたり培ってきたノウハウをもとに製版します。製版システムは最新のイクオス・スーパーセル（260線）を採用しています。

高精細カラー版で肝となるのが、原本との色合わせ。八木書店の影印版では、色校正は「本機校正」つまり実際の印刷機・印刷用紙で印刷した校正紙で点検し、原本との照合を数度行います。

印刷工程には編集者が立ち会い、最終調整で刷り出しを確認をしたうえで、実際の印刷を行います。印刷機は最新のハイブリッドUVシステムを採用。速乾性があり、色合わせの判断・調整が格段に向上しました。



4) 職人技を駆使した製本

影印出版では、図書館・研究者など長年の連用に耐える本作りが欠かせません。そのために糸かがり、上製クロス装とし、堅牢にして日常の連用・長期保存に耐える製本とします。

製本は特殊製本を手がける東京・博勝堂が担当。『熱田本日本書紀』では菊倍判（304×218mm）という大きな判型を採用。こうした特殊な製本では、熟練の手作業が必要となります。

5) 長い工程を経て完成です！ 美しい版面を是非ご堪能ください

重要文化財・高精細カラー版



全三冊 二〇一七年十二月刊行 (分売可)

菊倍判 (304×218mm)・上製クロス装・貼函入
三冊揃九二二頁

セット本体二〇、〇〇〇円十税

第1冊 巻第一―巻第四

神代―開化天皇

和歌懐紙 (巻第三・四)

ISBN978-4-8406-2217-2 本体四〇、〇〇〇円

第2冊 巻第五―巻第十

崇神天皇―応神天皇

和歌懐紙 (巻第五・六・九・十)

ISBN978-4-8406-2218-9 本体四〇、〇〇〇円

第3冊 巻第十一―巻第十五

履中天皇―仁賢天皇

和歌懐紙 (巻第十一―十五)

寄進状／解説 (書誌・熱田社史・訓点・料紙)

ISBN978-4-8406-2219-6 本体四〇、〇〇〇円

多角的な解説 (執筆順)

書誌

荊木美行 (皇學館大学)

熱田社史

遠藤慶太 (皇學館大学)

訓点

野村辰美 (熱田神宮)

料紙

福井款彦 (熱田神宮)

木田章義 (京都大学名誉教授)

大槻 信 (京都大学)

渡辺 滋 (山口県立大学)

熱田本 日本書紀の特長

●重要文化財の写本を初公刊

永和元年 (1375) から永和3年 (1377) にかけて熱田神宮に奉納された、重要文化財「熱田本 日本書紀」冒頭15巻 (巻第11欠) を初公刊。うち7巻 (巻第3～9) は現存最古。

●本文校訂の資料

翻刻テキストの底本として広く使われている日本古典文学大系本『日本書紀』の底本「卜部兼右本」よりも書写年代が古く、本文を再検討する重要な資料に。

●未知なる訓点資料

朱・墨の古訓を多数載せており、日本語の伝来・形成の過程を知る手がかりに。

●中世文芸を知る和歌資料

紙背にある室町時代の和歌懐紙163点を全点掲載。日本書紀奉納者である金蓮寺四世浄阿を中心として催された歌会の歌を記す。当該期の文芸を知る貴重な文献。

高精細カラー版の特長

●原本を忠実に再現

原本撮影、原本との色校正、印刷時の立ち合い点検等、徹底した品質管理により、墨朱濃淡、微妙な彩色、微細な訓点、料紙の紙継・補修痕、擦消し・書き込み修正など本文校訂の様相等々、豊富な原本の情報を忠実に再現。

●迫力の大型本

判型は大型の菊倍判 (304×218mm) を採用。迫力の大型画像で原本を体感する。

●原本調査をふまえた多角的な解説

書誌・熱田神宮の歴史・訓点・料紙など、各専門家が原本調査をふまえた書き下ろしの多角的な解説を収録。

ご購入者全員に特製カレンダー
「熱田神宮 名宝選」プレゼント

ご購入者全員へもれなく2018年八木書店特製カレンダー (非売品) をプレゼントいたします。ご購入の『熱田本 日本書紀』に挟み込まれている応募はがきに、住所・氏名・名前・ご感想を記入のうえ、投函ください。後日、郵送いたします。[申込期限:2018年3月末日まで]

〔図〕表袴 白竊霞文二重織 (p.1,3,5-8 中央)・小串和夫宮司 (p.2)・熱田神宮本宮拜殿 (p.2)・単 萌黄繁菱文固綾織 (p.2,3,8 上下) すべて熱田神宮所蔵・提供

発行

八木書店

Yagi Bookstore Ltd. Publishing Dept.

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8

●Tel: 03-3291-2961 [営業] 03-3291-2969 [編集] ●Fax: 03-3291-6300

●E-mail: pub@books-yagi.co.jp ●https://catalogue.books-yagi.co.jp/

取扱店